

ピヨタの冒険



絵作
新田村

陽章
奈訓

ひよのピコタくんが遊んでいた。
ぐじさんが何かを探していました。

「ぐじさん。ほんにちは。もうしたの？」

「やあ、ピコタくん」「ハイチバ」

「実はね、大切なカギをなくして

しまったんだよ」「スマートル、スマートル」

「えりだらう。こっしょに探してくれないか」

「へん。じょう」

ピコタくんはぐじさんを助けてあげるにしました。

「私はじいじの辺を探すから、ピコタくんほんのりんごの中を探してくれないか」「サガシテ」

「へん。じょう」

ぐじさんが、りんごを齧ると中がぴかっと光りました。
「わっ、おどろこ」

「ピコタくんが田を覚ますと、そこは不思議な世界でした。

「わー、すじー。お菓子がじつぱじだあ」

キャンディの木、綿菓子の雲、チョコレートの川、アイスのお花畠。

ピコタくんは夢中になつてお菓子を食べました。

「あ、あれは僕の大好きなメロンパンだ」

「パクッ――。

「ふてててて。誰だ、俺をついばむやつは」

「わー、だめんなさい」

ピコタくんがパンだと思つて、食べたのは大きなカーネルでした。

おなかにある大きな一つ田でじつと見てきます。

「うわー、こんなとじれで何をしてじるんだ」

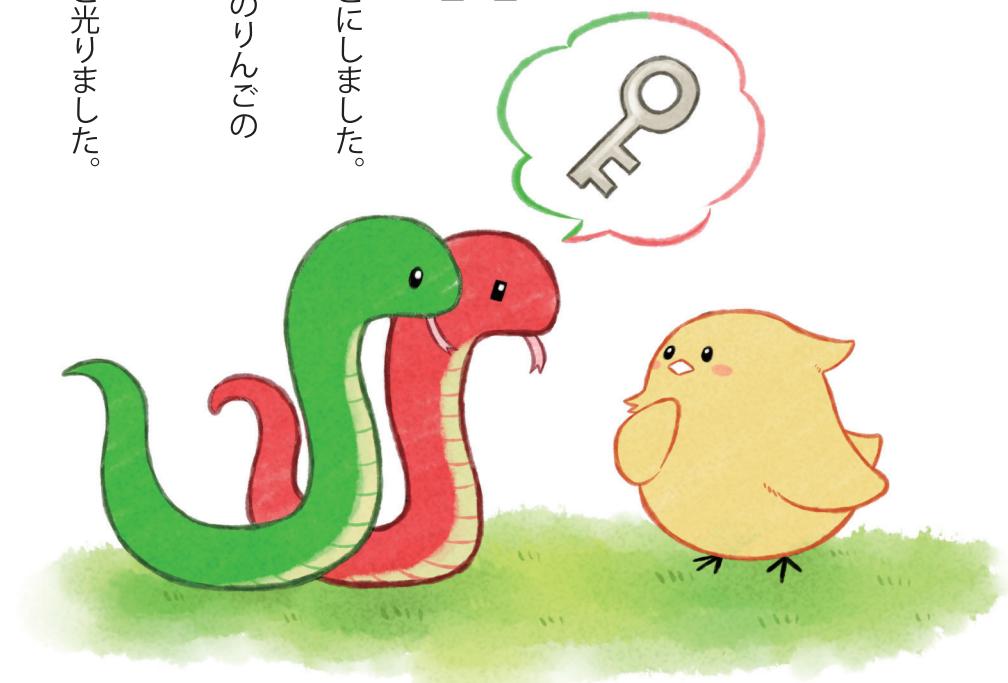
ピコタくんは震えながら、答えました。

「僕はぐじさんのカギを探しにきたんだよ」

「ぐじ? ああ、それなり向こうのほうに行つたのを、さつき見たよ」

「ほんとにー」

親切なカーネルさんに道を教えてもらひ、ピコタくんは再び歩きはじめました



しばらく歩いていたと、ぐるぐると田が沈んでしまって、周りは真っ暗になりました。

お母さまに照らされて、ぴかっと何かが光りました。

「あ、あれは」

ピタタくんはぐじさんのかぎを見つけました。あとはお家に帰るだけです。

でも、真っ暗な道を進むことができません。

木ががさがさと揺れるたびに、ピタタくんは止まってしまいます。

「うわよお」

「どうしたのかね」

声がしたぼつを見ると、大きな口を開けたお母さまがいました。

「あのね、僕、ぐじさんのかぎを探しにきたの。

かぎは見つけたから、お家に帰りたいの」

「なんだ、そんなんとか」

ピタタくんの話を聞いたお母さまはわははと笑いました。

そして、ひょいとした長い腕でピタタくんを捕まえると、口元まで持っていくや.....。

「わー助けてー！」

——パクッ。

「わー。」

田が覚めると、今まさにピタタくんのお家でした。

「あひあひ、うひひったの」

ピタタくんの声を聞いて、お母さんと会いました。

「怖い夢でもみたの」

「へん。あのね、お母さん……」

ピタタくんは見ていた夢を

お母さんに話しました。

じいじ手に入れたのかわからぬ
かぎを持つて。

窓から見える空には、お母さまが星たちと一緒に輝いていました。

〈終〉

